この世界を守るために

kafuca

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この世界を守るために

【Ｎコード】
Ｎ５１９９Ｍ

【作者名】
ｋａｆｕｃａ

【あらすじ】
マナが世界に満ち溢れています。
マナは魔法の源です。それを使って、空を飛んだり、パワーアップしたりします。
。
そんな世界は、今とある人たちによって、破壊活動が行われています。
まぁ、大変。。

そんな感じだと思います。。

多分、後ろにいくほど面白いはずです。。というか、最初の何章かは楽しむところがない気がします。。

冒頭

「いやぁ、こっちは住みやすいなぁ。北半球とは大違いだ」
「はっはっは。そんなにちがうかね？　南半球でもこの辺はそこまで良い土地でもないよ」
「いやいやいや、マナの密度が全然違う。手に力が入る……いつまでも動ける気がするよ」
　二人の農夫は、手に持つ鍬に力を入れる。それを地面に強く振り下ろす。

　世界にはマナが満ちている、空気のようにこの星の隅々まで隙間なく。

「それは大げさすぎないかね、向こうはそんなに荒れているのかい？」
「あぁ、気候はそんなに変わらないよ。ただ、マナの密度が薄いから、隣町まで飛ぶのも一苦労だよ」

　人々はマナを自分の手足のように扱い、それを魔法と呼んだ。

「へぇ、そんなに違うもんなのかい？」
「あんたも行ってみるといいさ、この鍬だって畑に持ってくだけで息切れするよ」
　自分の背丈の倍以上ある大型の鍬を振り回しながら、言葉を返す。
「そんなもんかねぇ……？」
「おれもこっちに来るまでは疑ってたんだよ、でもみんな帰ってこねぇ理由がわかったよ」
　浅黒の農夫は大きな口で笑った、うっすらと汗をかいているが、顔に疲れは見えない。

「俺は生まれてこのかた国から出たことねぇからなぁ……。なぁ、そろそろ休憩にしねぇか？」
背の高い農夫はそう問いかけ、勢い良く鍬を下ろした。もう休むつもりだ。
今日は本当によく晴れた。雲ひとつなく、涼しい風がうっすらとかいた汗をすぐに乾かす。
「そうすっか」
浅黒の農夫も鍬を下ろし、背の高い農夫といつもの木陰に腰を下ろした。その木陰からは、この国王が住む城が見える。
城まではかなりの距離があるが、その大きさはここからでもよくわかる。元々、マナの密度が濃い土地であり、それは国の発展にも防衛にも、また他国の侵略にも優れた要素だ。そのため、このゴカエの国は長く強国であり、周辺の国々への影響も大きかった。あの巨大な城に象徴されるように、防衛面での評価が高く、他国から侵略を受けたという話は聞いた事がなかった。
「飲むか？」
「おっ、すまないねぇ」
浅黒の農夫は水筒を受け取り、口をつけた。
浅黒の農夫は、南半球に来て日が浅いながらも大きな満足を感じていた。体は軽く、民は裕福でなくても余裕があり、小さいながらも畑と家も手に入れた。近いうちに親戚も呼ぼうかと考えていた。いずれ、城に近い一等地に引っ越そうという目標もある。充実を感じていた。

「風が出てきたなぁ」
背の高い農夫は呟いた。
「ん？あぁ、そういえばそうだなぁ……」
浅黒の農夫が返事をしたその時、後ろの方から大きな音がした。
一瞬の破裂音の後、いくつもの木の枝が折れる音と、鍬を地面に振り下ろした時のような音、嵐が近づいている時に戸が震える音、貴

重な陶器の器を割ってしまった時の音、それらが全て混じった音が聞こえた。それが音量を上げ近づいてくる。
二人の農夫は、同時に後ろを振り向いた。
あの巨大な城の何倍あるのかという高い壁、端がどこなのかわからないわからない長い壁がそこにあった。正確にいうと壁ではない。木、土、岩、水、家、馬、そして、人、あらゆるものが混ざって、巻き上げられている。巨大な巨大な竜巻だった。
「うわぁーっ……！」
二人の農夫は一瞬の間の後、一気に走りだし、地面を蹴り上げた。マナを操り、体を真横にして全速力で空を飛び抜けた。大人にもなれば、全速力というのはかなりの速さが出る、それは野生の動物なら軽くあしらえるほどに。だが、それ以上に竜巻は速かった、木も岩も道も関係なしに迫ってくる。耕した畑を越え、その先、村までの長すぎる一直線で遂に竜巻に囚われた。
浅黒の農夫は、竜巻の中で巨大な黄金の龍を見た。日本の尖った角、切れそうなほどするどい目付き、長い長い2本の髭と、大人が十人は入るであろう大きな口、尾が見えないほどの長い長い胴。
（……ん？上に誰か乗ってる……？）
そう思った時、浅黒の農夫の頭に太い木の幹が直撃した。浅黒の農夫は、意識を失った。

1章

「くそっ、またやられたってのかよ！」
俺は机を拳で強く叩いた。突然の大きな音に周囲は一瞬静まる。
「諜報部はなにやってんだよっ！これで2回連続。2回も連続で、あいつらにやられてる」
「ガイナ、ちょっと落ち着け、諜報部だって遊んでるわけじゃないんだ」
隊長のヤードに窘められる。
「でも……くそ！」
俺は、もう一度机を、今度は少し軽く叩いた。思ったより大きな音がした。だが、それでも感情は収まりそうにない。
「お前らももう知っていると思うが、一昨日『アルーファ』の襲撃があった。場所は、ゴカエの国だ」
隊長のヤードの発表を聞いても、第3部隊の隊員は誰も表情を変えない。少し前に、ゴカエの国の襲撃について発表があると流れたからだ。
「範囲は、ゴカエの主城、ゴカエ城の南西約５０キロメートルの地点から、北東約３０キロメートルまで一直線に８０キロ。その距離を幅約３０キロメートルにわって荒地に変わった」
「はち……じゅう……？」
ざわついた雰囲気の中、隊員のポンは小さく呟いた。
「ゴカエはほぼ壊滅した。死者も想像つかない。連絡手段すらない。この被害も隣国のフルヤの商人からの報告で判明した」
「くっ……そっ！　おかしいだろっ！　なんだよ８０キロってよ？　そんなでかい作戦すら見逃して、俺らがいる意味ねぇじゃねぇかっ！」
ゴカエは、小さな国だ。農業的にも商業的にも世界に影響を与えるような規模を持っていない。しかし、マナが豊富に集まる地域で

あり、マナの研究が盛んな地域でもある。兵士達は、みんなマナの扱いに長け、小国ながら過去に大敗するような戦争を経験していない。その国が経ったの1日で壊滅した。その事実を認識すると、怒りと虚しさで、振り上げた拳を叩きつけたくなる。

「俺たち第3部隊と、これよりゴカエの国の調査に向かう。事前に連絡をしたから、準備は済んでいると思うが、すぐに出発する。ミーティング集合後に、第2飛行船に乗船し、ゴカエに向かう。何か不明な点はあるか？……ないな？解散」

「はい！」

ここのところ、アルーファが活動のペースをあげている。以前は、小さなものは月に1度、大きなものは年に1回ぐらいであったが、今は毎月どこかの村や町が無くなっている。アルーファの活動は南半球だけに限られているものの、国を越え、海を越え、無差別に行われているので、対策を取るのが非常に難しい。そのために、この平和連盟があるというのに、諜報部は空振りばっかりだ。俺らの活動も、対アルーファではなく、復興活動や調査活動になってしまう。これでは、被害は減らないし、後手後手にまわってばかりだ。

「ガイナさん、落ち着きましたー？」

飛行船から、見える海を眺めていると、後ろから声を掛けらた。振り向くと、栗色の髪を肩まで下ろした、猫目の女の子がたっていた。

「ポンか、どうしたんだ？」

「ガイナさん、最近荒れ気味じゃないですかー？なんかあったのかと思いましてっ！」

そういって、ハーブティーの入ったカップを渡してくれた。ポンは第3部隊の唯一の女性兵士だ。魔法による補助と遠距離攻撃を担当する後方部隊だ。落ち着きのない猫目と小さな口と鼻で笑顔は似合っているが、色白の肌と俺の肩までしかない身長で、兵士には見えない。

「最近、イライラしてませんかー？ちょっと落ち着きましょうよー、隊長にもいつも言われてるじゃないですかっ」
　ポンの話し方は特徴的だ、疑問形の時は語尾が伸び、それ以外の時は小さな『っ』が必ず入る。普通ならイラッとしてしまう話し方だが、それでも憎めないのはポンの性格だからか。
「俺はいつも落ち着いてるよ。ただ、少し机を叩きたくなるだけだよ」
「それは落ち着いてないですよっ」
　そんな事を部下に言われて、何かあると机を叩く癖がついたのはいつからだったろうか、と少し考える。俺はずっとイライラしているんだろうか？　だったら、それはいつ終わる？　いつ止まる？
「顔暗いですよっ。せっかくの綺麗な景色なんですから、顔をあげましょうよっ」
　ポンは、上官であるはずの俺にもどんどん話しかける。言葉遣いが敬語なだけで、中身は普通に友達に話すようなものだ。
　言われた通りに顔をあげると、眼下に壮大な海を感じる。日の光にキラキラと輝く水面がどこまでも続き、自分が小さく感じる。

　この飛行船は中型のもので、約３０人が搭乗できる、今回は第３部隊２４名と飛行士４名、補助員２名だ。巨大なマナ袋にマナを詰め、それを調整して浮力と推進力を生み出す。１度マナを詰めてしまえば、マナの消費をせずに浮力を得られるので、上手く風を捕まえれば、マナを消耗することなく速く移動できる。古くからある乗り物だが、１０人以上乗れるものが作られたのは、ここ十数年のことだ。今では、搭乗人数が１００人を越えるものもある。
「ポンは飛行船好きか？」
「え？　いきなりですねっ。でも、飛行船は好きですよっ。高いところから見下ろす景色って綺麗ですよねっ、任務と関係無く乗りたいですっ」
「そうか。でも俺はだめだ……。この足元が揺れてる感じ、気持ち

わる……い……」
「ガ、ガイナさんーっ！？」
部下の手前、気持ち悪くて外を見にきたとはいえず、クールを装ってたものの、それも限界にきた。かくっと膝を折り、床に手をつきトイレまで四つん這いでふらふらしながらトイレを目指す。だが、今の俺にはトイレは遠すぎた。
「ガイナさんっ！　だいじょぶですかー？　支えますよーっ？」
ポンが驚き、心配しながらも近づいてくる。
「だ、だめだっ……くるな…。こないで……。うぐっ」
俺は部下に見せてはいけないところを見せた。

2章

「……ここが本当にゴカエなんですかー？」
ゴカエの国に着き、今はゴカエ城跡となってしまったが、私たち第3部隊は飛行船から下を見下ろした。　そこには、ただ広いだけの荒れ果てた土地が広がっていた。ほんの数日前まで、人が住んでいたなど、ましてや中規模の国の城があったなどとは考えられないほどの、広い広い焦げ茶色の土地があった。
「俺も信じられないが、座標はあっている。ここはゴカエだ」
ヤード隊長の声を聞いても信じられなかった。
私は以前、ゴカエの国に来たことがある。ゴカエはマナと魔法についての研究が進んでいる。私が、諜報部から第3部隊の後方支援担当になった時に、休暇を利用してゴカエにやってきた。研究が進んでいるだけあって、国営、民営ともいくつもの施設があり、たった4日間の滞在でもとても充実したものだったのを思い出す。
（あれから、もう3年か……）
私が、3年前に城と街を訪れたとき、民のほとんどは農家であり、豊かな暮らしはしていなかった。だが、開発されていない豊かな自然と、人工的なマナ研究関連の施設との対比が特徴的だった。小屋のような民の家と山のように巨大な城、学者や魔法師などの知的な民と農家の筋肉質な民、色々な対比が存在する興味深い場所だった。それが今では、だだっ広いだけのただの土地となっている。木の枝や葉、太い幹、大小の石や岩、家の壁だったものや木材、焦げ茶色の土、それらが乱雑になり、立派な荒地を表現している。動くものは一切無い。
飛行船は荒地のど真ん中に降り立ち、私はみんなと荒地に降りた。風は強い、遮るものが何も無いからだろうか。
「マナが薄いな。ここは豊地じゃなかったのか？」

私の前を歩くガイナさんが呟いた。
マナが豊富な土地は、豊地と呼ばれる。気候的なもので、世界に何箇所もある豊地は、もう何百年、何千年と位置も性質も変わっていないはずだった。それがこの土地では、マナがとても薄くなったのを感じる。まるで北半球のようだ。こんなこと、誰ができるのだろうか。

「みんないるか？」
隊長が大声で隊員を呼ぶ。
「これから、予定通り、４小隊に分かれ、付近の探索をする。生存者の発見と救出が第一、第二に自分達の安全、第三に近辺の異常の発見。ほとんど何も残って無さそうだが、異常がある場所の座標は覚えておけ、明日夜到着予定の諜報部に渡す。特に危険な箇所は記録を取り、排除しておけ。何か質問あるやついるか？」
隊長は、「解散！」と怒鳴ると、薄く白い光をまとって北北東へ飛んでいった。その後を、同じように白い光をまとって飛んでいく。すぐに、東南東へも６人、西北西へも６人が一直線に飛んでいく。飛行船はすでに離陸し、上を見上げると段々と小さくなっていく。
「俺らもいこう」
ガイナさんの掛け声に返事をし、ガイナさんを先頭に６人で南南西に向かう。

向かい風が強く、低い位置を飛ぶもののマナの効率が悪く、速度も出ない。ましてや、ここはもうマナの密度が北半球並なのだ。不測の事態と帰りのことを考えると、無駄な消費はしたくない。そんな事を考えていると、ガイナさんは地面に降り、肉体強化型の魔法に変更し、地面を跳ぶように走り始めた。みんなも続く。
「ガイナさーん、何もないっすねー」
「あぁ、何もない。何もないけど、何か見つけるんだ。次を防ぐために……」

「はぁ……どうしたらこんな事ができるんすかねぇ……」
ガイナさんと隊員のシャクの声が聞こえる、二人の声はかたい。こんな何も無い、悲劇の土地を向かい風に歩いていて明るくなるわけもないが。
探索を始めて見たものは、飛行船からみえたものと同じものだ。木、岩、土。壁、板、木材。枝、草、土。空は、厚い雲が流れている。降りそうにはないが、いい天気ではない。空中で待機しているはずの飛行船は大丈夫だろうか。南に向かって、なだらかな坂がずっと続いているせいか、前方の見通しは悪くない、先の先には森が見える。
「ポン、お前の探査魔法のほうはどうだ？」
「あ、はいっ。前後左右に約４キロ、上空に５００メートル、地下に５０メートルのマナ反応重視の感知魔法をかけていますがっ、何も変化はありませんっ」
慌てて、ガイナさんの声に返答する。飛行船を降りて、調子を戻したみたいに見える。それにしても、何も私の魔法に引っかからない。
この魔法は、自分を中心に弱い弱い結界を張り、その中にあるマナの発せられる場所を感じ取るためのものだ。諜報部の活動で鍛えたおかげで、この類の魔法は第３部隊で一番使いこなせる自信がある。範囲も精度もマナの消費効率も負けないと思う。それだけ自信のある感知魔法なのに、何も反応は感じない。時折、地下で弱い反応があるが、これは経験から地下に住む動物か魔物だろうとわかる。
「ガイナさーん、どうせ何もないし、わかれませーん？効率悪いっすよこれじゃ」
「そうするか、じゃぁ３つにわかれよう」
走りながら組み分けし、シャクの組は東へ向かい荒地の端に着いたらそこから南下することに、もう一つの組も同じように西へ行って南下。
私とガイナさんは、このまま予定通り南下。私の感知魔法が一番

範囲が広いというのと、何かあったときガイナさんがどちらへも行けるようにと、二人組になった。
「何かあったら、シーバーを繋げ」
「わかりましたー」
私とガイナさんを残して、４人は左右に分かれた。

シーバーは、マナの力を利用した小型の通信機器だ。半透明の薄い紫色で、握り拳ほどの大きさだ。使う者同士が、予め、互いのシーバーに触っておけば、離れていても会話が出来る。但し、シーバーに蓄えたマナの量により会話出来る時間は限られ、また距離も離れるほどマナの消費も激しくなる。また壊れやすく、乱暴な扱いをするとすぐに割れてしまう。だが、このような任務の時には、必ず一人１個は必要なものだ。
「ガイナさんっ、感知魔法の範囲広げておきますかー？」
「あぁ、頼む」
私は範囲を限界まで広げて、ハイペースで走るガイナさんの左側一歩下がったところをついていく。ガイナさんの横顔は、飛行船の時の蒼白い顔とは別人のような緊張感を示している。
「ガイナさんっ。ガイナさんは乗り物がダメなんですかー？」
「ん？　あぁ、ダメではないんだぜ。……でも酔うんだ」
「それはダメなんだと思いますよっ」
「そういえば、ガイナさんって……あっ！　あれ？　反応がありますっ。多分、人ですっ、人っ！左斜め、４．５キロメートルっ」
「本当かっ？急ごう！」
「はいっ」
私たちは一気にペースを上げた。体を包む薄く白い光は少しだけ、強くなった。

3章

北半球の痩せた土地。深い森の中の洞窟。

油を使ったランタンの火が二人の男を照らしている。色黒で大柄な筋肉質の男と、痩せた線の細い色白の男。

大柄な男は口を開いた。

「よぉっ、今回は久しぶりのでかいのだったが上手くいったな。お前大丈夫か？」

「うん、心配はいらないよ。しばらく横になっていれば治るよ」

「そうやってまた1ヶ月ぐらい、寝たきりなんだろ？まぁ別にいいけどよ」

「もうあまり時間は無いからね。少しぐらい無理しても踏ん張らないと」

「だからって、お前が動けなくなったら誰がうちを動かすんだよ。最近は、イロハの警戒も厳しくなってるぜ」

「僕がいなくても、バトイがやってくれるでしょ？なら安心だよ」

「俺？俺じゃお前の代わりは無理だよ。うちはお前がいてこそだ」

「そんなことないよ、今だって運営はほとんどバトイがやってくれてるし」

「サポートはするさ、でも俺が、俺達が出来るのはそれぐらいだ。俺たちの力なんて、お前の力の前じゃ、無いようなもんだからな」

「……たしかに僕の力は特別なものだ。それでもみんなの力には敵わないはずだよ」

「んなこと思ってるのはお前だけだろ。全員が束になっても、お前の足元ほどの魔法も使えない」

「……本当は使わない方がいい力だし、僕も使いたいわけじゃないんだけどね」

「そんなん全員わかってら。うちのみんなは誰よりもお前を心配し

てるし、理解しているっつの。その強い力も、その苦しみも」
「ははっ、ありがたい話だ」
「こっちは何とかするから、力が戻るまでしばらく寝てろよ。ひと月ふた月は、お前無しでもなんとかなる」
「無理しないでよ」
「お前が言うんじゃねぇよ。じゃぁな」
「よろしくね」
バトイと呼ばれた大柄な男は、ベッドに背を向け、扉に向かって歩き出す。ノブに手をかけ、扉を開ける。
「そういやぁよぉ、ビガの賢者の力が弱まってるってな」
「うん、多分2，3ヶ月ぐらいじゃないかな、代替わりまで」
「へぇ、わかるもんなのか？」
「うん、なんとなくだけどね」
「それも特印の力なんか？」
「そうだね」
「便利なもんだな」
「はは、使い道なんて何もないよ」
「それもそうだ。じゃぁな」
バトイは、扉をくぐり、外へ出て行った。扉が標準より小さく感じるが、それだけバトイが縦にも横にも長いからであろう。だが、体に弛んだ部分は無く、日頃から筋肉に相当な負荷をかけているのが察せられる。

一人残された痩せた男は、枕元のシーバーを手に取った。シーバーが一瞬だけ強く光り、時折、弱い閃光を放ちながら、淡い光りに移行する。その後、シーバーから声が流れる。
「どうしましたか？」
「ちょっと前回の資料を持って来てもらっていい？」
「わかりました、今いきます」
しばらくして、また扉が開く。そこから、タイトな服装をした長

身で細身の女が入ってきた。そして、痩せた男に紙の束を渡す。
「まだ解析が終わっていませんが、これが今わかる限りのものです。進行度は４５％ぐらいでしょうか」
　長い黒髪を後ろに簡単に縛っただけの髪型、切れ長の目に黒縁の眼鏡。片耳に水色のピアスを垂らしている。その容貌からは、厳しさと几帳面さを感じさせる。
「前回の作戦以降のマナの流れはどうなってる？」
　男は、資料を見ながら女に尋ねる。
「想定より南南西の風が強く、計画より多くマナが流れてしまっています。流れを調節する結界はまだ見つかっていませんが、先刻調査隊が派遣されたようなので、それは時間の問題です。ですが、その結界が解かれれば、流れも正常になるので、２，３ヶ月ほどで正常値になるかと」
「うん、今回の作戦も上手く行ったみたいだね」
「はい」
「それとお願いがあるんだけどいい？」
「なんでしょうか？」
「ビガの賢者がもうすぐ代替わりするんだけど、次の賢者を探してほしいんだけど」
「まだ少し時間があるから、まだ正確にはわからないと思うけど、わかり次第報告してくれる？」
「わかりました。……それでどうするんですか？」
「仲間に入ってもらおうかなって」
「なるほど。いいアイディアです」
「でしょ。よろしくね」
「わかりました。では失礼します」
　カツカツと音を立て、足早に部屋を出て行く。だが、几帳面にドアを閉める音は立てない。
「メガはいい人なんだけど、ちょっととっつきにくいなぁ……」
　色白の男は、資料を眺めながら、独り言を呟く。十数枚連なる資

料を1枚1枚目を通し最後までいくと、枕元に重ねられた本の上に置く。ふいに、ランタンの火が揺れ、白い寝間着に明暗を作る。男は、ランタンの火を消し、暗くなった部屋で眠りについた。

4章

「ここですっ、この下っ、地下約2メートルですっ」
「わかったっ、ちょっと下がれ」
ポンの感知魔法が人を捉えたと聞き、ここまで全速力で走ってきた。ポンは、感知魔法を発動したまま付いてきたせいか、少し息が上がっているようだ。それにしても、前後左右１０ｋｍにも及ぶ感知魔法を発動させながら、付いてくるとは中々センスがあると思う。
俺は、地面に掌を向け、掌から先の部分に精神を集中させた。腕全体が白く淡く発光し、閃光を放つ。閃光の一部が地面に触れ、その瞬間白く淡い光の円が描かれる。直検ほどの円に沿って、音もなく地面に切り込みが入る。次の瞬間、破裂音と共に、その円を直径とした円筒が地面から一気に盛り上がる。高さ３ｍほどのその円筒は、大小様々な石、木の枝、よくわからない破片などを含んだ焦げ茶色の土の塊だった。土の円筒は、地面から３０ｃｍほどの空中に静止し、淡く光っている。その光は、俺の両手と薄く繋がっている。
「ポン、いるか？」
「はいっ、この土のちょうど中心部にっ」
俺は左手を円筒にかざしたまま、今度右手を上にかかげる。右腕は、強い光を放つ。俺は勢い良く、土の円筒に右手を突き刺した。
「どこだ……？」
右手で、土の円筒の中をかき混ぜる。
「いたぞっ！」
右手は、遂に人の腕らしきものを掴んだ。
「ポンッ、ちょっと離れてろっ」
「はいっ」
左手は土の円筒にかざしたまま、右手は腕らしきものを掴んだまま、さらに集中する。両方の掌に力を込める。そして、蝋燭が消える時のように、ふっとした瞬間、土だけが砂が落ちるように、地面

に開いた穴へと戻っていった。右手に集中し、掴んだものだけを空中に固定する。半分ぐらい土が落ちてから、掴んだものを保護しつつ、半ば強引に引っ張りだし、横の地面に寝かせた。心臓部に耳を当て鼓動を確認した。防護魔法を使っているのか、全身が弱々しい光に包まれている。だからこそ、襲撃から3日経った今でも息があるのだろう。

「ポン、飛行船に連絡しろ。保護してもらう」

「わかりましたっ」

ポンはシーバーを出すと、連絡を始めた。俺は、農夫に両腕を向け、回復魔法と防護魔法を放つ。農夫は、一際強い光に包まれる。これで、傷口の消毒と止血、細胞の活性化、風と気温の影響の遮断、マナの流出の阻止ができる。骨や内臓まではわからないが、体力の回復にはつながるだろう。

「ガイナさんっ、飛行船すぐ来ますっ。もう私の感知圏内に入ったので、すぐだと思いますっ」

「了解。他に何か異常はないか？」

「今のところは無いですっ。あっ！　きましたよっ」

飛行船は少し離れたところに着陸した。これだけ強い風にもかかわらず、ぶれる事無く着陸した。どういう仕組みなのかわからないが、気になるところだ。

俺は農夫を両腕で抱えると、飛行船へと歩き出した。ポンもすぐ後ろをついてくる。

飛行船の中に入り、補助員のセチさんに声を掛け、小さな医務室へ運ぶ。

「へぇー、これだけぐっちゃぐちゃにされてるのに、生存者がいるとはねぇ……」

「大丈夫そう……か？」

「パッと見た感じ、大きな外傷はないね。内蔵も……、多分大丈夫だろうね。頭の方も……ここでは異常は見つからないよ」

セチさんは、右手を農夫にかざしながら答えた。セチさんは、基

本的には整備士だが、救護の腕も素晴らしいものを持ってる。
「そうか、ならよかった」
「でも、かなり疲労してるねぇ。とりあえず、回復魔法はあんたがかけてくれたから、とりあえず寝かしとくよ」
「ありがとうセチさん」
「はいはい。残りの探索も頑張ってねぇ」
「セチさんっ、よろしくお願いしますっ」
「ポンちゃんも気ぃつけなよー」
「はいっ」
「あ、そうだセチさん。他の小隊からは連絡ない？」
「今のとこないみたいだねぇ」
「わかった、ありがとう。ポンいくぞ」
「はいっ」
「いってらっしゃーい」
ポンと二人で医務室を出て、飛行船の出口へ向かう。
「異常無さそうでよかったですねっ」
「あぁ、ここまで来た甲斐があるな」
飛行船を出るとすぐに、飛行船は離陸した。この強風の中、やっぱり揺れることすらない。
「探索の続きだ、感知魔法はまだ張ってられるか？」
「これぐらいの感知魔法なら、2，3日はいけますよっ」
「それは頼もしいな」
「このままま南下するぞ……ん？」
いきなり俺のシーバーが強い光を放った。シャクからの通信のようだ。
「シャクか？どうし……」
「ガイナさんっ、こっちやべぇっす！ちょっと助けてくださいよっ！」
いきなりシャクの大声が聞こえてきた。息も上がってるようだ。
「おいっ、どうしたっ。状況説明しろっ」

「虎っ虎っす。多分、ゴイルタイガーっす。うぉっ！」
「なっ」
ゴイルタイガーは、南半球コエド地方の密林に住む魔力を持った動物、魔物だ。その硬い皮膚が特徴で、並の武器では傷すらつけられない。たしかに、ここゴカエの国はコエド地方でありゴイルタイガーの生息域ではあるのだが、彼らは夜行性のはずだ。
「シャクっ、今そちらに向かう。俺が行くまで耐えろっ」
「早めにお願いしますっ。……おいっ、ガイナさんすぐ来るって、耐えろっ」
そこで通信が途切れ、俺はポンと顔を見合わせた。俺は集中し、全身にマナを循環させ、強い光を放つ。そして、右足で強く地面を蹴り、空へと舞った。すぐに最高速に達するが、すぐ後ろをしっかりとポンがついてきている。
俺たちは2本の白い光となって、東へ向かった。

5章

私は、精一杯のスピードでガイナさんの後を追う。風も強く、マナが少ないこの土地では、上手く飛ぶことすら難しい。だけど、ガイナさんはそんな状況をものともせず、ものすごい速さで飛んでいく。付いて行くどころか、離されないようするだけで、いや少しづつ離されている。だが、ここで離されるわけにはいかない。魔物の存在が確認されたからには、一人になるのは危険だ。それにここは荒地が続き、身を隠すような場所もない。

（そうだ、他の小隊にも連絡しないと……）

「ガイナさんっ、他の小隊にも魔物がでた事っ、伝えときますっ」

私が叫ぶと、ガイナさんがうなづいたのがわかった。シーバーを取り出し、他3小隊の班長に繋ぐ。シーバーが強い光を放つ。

「こちらガイナ班ですっ、飛行船の位置より南東にて魔物の存在を確認しましたっ。他の班も注意願いますっ」

次々と返答の声が聞こえる。それを確認して顔をあげると、またガイナさんと離されていた。だが、もう着くはずだ。

ここはもう荒地の外れだ。少し先の荒地のすぐ外には、唐突に森が並んでいる。

「いたぞっ、あそこだ」

「はいっ」

減速し、地面に降り立つ。前方、約１００ｍの位置で、シャクが背丈と同じぐらいあるほどの虎と対峙していた。あの灰色がかったいかにも硬そうな肌は、ゴイルタイガーだ。

「ポン、援護しろ」

「はいっ」

ガイナさんは、背中に抱えた大剣を抜き、両手で持ちシャクの方に走り寄っていく。私は、急いでガイナさんに手をかざし、身体強

化と武器強度の強化の魔法をかける。ガイナさんは、光に包まれ加速する。
「シャクーッ！」
「ガ、ガイナさん！」
ガイナさんは、ゴイルタイガーと対峙したシャクの横を通り、そのままタイガーに突進した。タイガーは，少しひるむが、すぐにガイナさんに一撃浴びせようと右腕を振り上げる。
私はその瞬間を見逃さなかった。右の掌に集中してマナを集め、白い光の矢を具現化して、タイガーの振り上げた右腕に放った。白い矢は一直線に向かい、タイガーの振り上げたに突き刺さった。そして、その腕を空中に固定することに成功した。
ガイナさんは、タイガーに正面から突っ込んだ。右腕が上がり、空いた胸元の真下から、両手に持った大剣を突き刺した。大剣は首に突き刺さり、貫通した。
その間に私は、シャク君のところまで行き、傷がある右腕に止血の魔法をかける。シャク君の右腕は淡く光る。
「あっ、あざっす」
「いえいえっ。さぁ、ぼーっとしてないで、ガイナさんのサポートっ」
「う、うすっ」
「あぁ、こっちは終わった。シャク、大丈夫か？」

そう言って、ガイナさんは、タイガーの頭部から大剣を引き抜いた。タイガーは、もう地面に倒れている。
「う、うすっ」
「相方のスンはどうした？」
「スンは、ええっと……」
「はいっはいっ。僕、ここにいますっ！」
スンは、森の木の影から現れ、小走りでこっちにきた。
「大丈夫か？スン」

「はい、大丈夫です」
「ならいい。だけど、何でお前ら別々に行動してる？」
「作戦っす！俺がゴイルタイガーを引きつけて、後ろからスンが攻撃魔法で仕留める、っていう感じのっす」
「そうなんですっ」
「そうか……。まぁ無事で何よりだ。だけど、次からは、もっと確実な手を考えるんだ」
　ガイナさんは何か言いたそうだ。だが、ガイナさんは意外にも下のものに弱いところがある。今も、本当はあそこまで２人の距離が離れてしまうような戦い方を叱責するべきであったのだろうが、どことなく迫力に足りない。アルーファの襲撃の件を聞く時など、あんなにも感情を表に出すのに。

「ポン、探索魔法を使ってくれ。出来るだけ広く」
「はいっ……」
　私は集中して、感知魔法ではなく探索魔法を発動する。より詳細に周囲を知る事ができるが、集中力を使うため、他の事は出来なくなる。
「えぇっとっ……近くに、もうゴイルタイガーはおろか、魔物、動物、人は確認できませんっ。またこの森についても、人が立ち入ったような形跡も……ないですねっ」
「そうなんすかっ。じゃぁ、このゴイルタイガーはどっからきたんすかね？」
「多分っ……こないだの襲撃の生き残りじゃないかとっ……巣のあった場所は荒地になってしまったけど、襲撃がきた時、狩りかなんかでこの森の端の方にいたんじゃないかとっ」
　今、私達が立っているところは、ほんの数日前までは森だったのだろう。だが、アルーファの襲撃で荒地になった。この残ってる森も、２０ｍほど進めば、もう海に出るのだ。深い森に住むゴイルタイガーが来るべき場所ではない。

私は、この場所の座標をメモし、もう一つの二人組に連絡を取る。
「ポンですっ。デシさん、そちらはどうですか？」
「あーあー、こちらデシー。ちょうど今連絡しようとしてたところだー。あったぞー、結界……」
「あっ……はいっ、ガイナさんに言って、今から向かいますっ」
やはり結界が見つかった。アルーファの襲撃場所に、かなりの確率で見つかる結界。特に大規模な襲撃の時は、ほぼ確実に見つかる。今回も、前回までと同様の結界なのだろう。
「ガイナさんっ、デシさんの方で結界見つかったそうですっ」
「本当かっ？　よし行こう。お前らもこいっ」
「う、うすっ」
ゴイルタイガーの分析を切り上げ、ガイナさんはこっちへやってきた」
「ゴイルタイガーの分析はいいんですかー？」
「もう終わったよ。て言っても、血と肉を少し剥ぎ取っただけだけどな」
「ガイナさん、いつもすごい手際がいいですよねっ。やっぱり経験ですかー？」
「手際の良さじゃ、ポンのが上だろう？ポンが言うと、嫌味に聞こえるぜ」
「そ、そんなことないですよっ」
ガイナさんの手はゴツゴツしている、既にいくつもの経験を積んでいるのだろう。まだ２３歳ながら戦闘部隊の副隊長をまかされ、なおかつ次の隊長候補にも上がってるぐらいだ、どれをとっても同年代の人より、頭２つは抜け出ている。今の私にとっては、大きすぎる目標だ。
「ポンっ、いくぞー」
「は、はいっ」
慌てて３人の方に駆け寄り、今度は４人で西へ飛び立った。

6章

「まーた、いつものだよこりゃー。一体何の為の結界なんだかなぁ」
ガイナ達は合流し、デシが発見したという結界の基点の一つに集まる。
「いつも通り、いつも通りの結界だぁ。基点は４つ、ここの基点が最北端で、南に約８キロごとに置かれている。効果はまだ続いてる、だがどんな効果があるのかはやっぱりわからねぇな」
デシが合流した４人に報告をする。デシは、まだ２６歳だが老齢の男性にも劣らない渋みを出している。よれた緑のキャップをかぶっており、口ひげを伸ばし、いつもタバコを加えている。肌は黒く焼けている。３０を越える隊長のヤードより、年上に見えることの方が多いらしい。
「ポンちゃん、記録頼むよ」
「今、終わりましたっ」
「はっはー。ポンちゃんはいつも仕事はえぇなぁ」
「これぐらいしか、取り柄がないんですよっ」
デシと話しながら、ポンは記録装置のスキャナをしまった。スキャナは、様々な種類のものがあるが、ポンが今使ったのは小型の鉱石タイプの空間スキャナだ。マナを含んだ鉱石が核にあり、使用者の能力に応じて空間の状況や特性をそのまま立体的に記録できるものだ。ポンほどの魔力があれば、半径５ｋｍ程の空間の特性を記録できるだろうと考えられる。
「後は、他の３箇所のデータも取っておきたいですねっ」
「早めに行っておくか」
ここの基点は、荒地になってしまったエリアの最南端より、少し西に行った林の中にある。ここから、北北東へ約８０ｋｍ、何も無くなってしまった荒地が続く。それも幅は３０ｋｍもある。
「にしてもよぉ、一体どんなバケモンがこんな事したんだ？　特印

でもきついんじゃねぇかぁ？」
「それでも、特印がいることは確定だろうぜ。賢者か闘士か、さては天子か……」
デシはガイナにぼやいた。
「ガイナさーん、今、うちは特印の動きをどこまで把握してんっすかぁ？」
そこへシャクが絡んでくる。
「あぁ、確か賢者が４人か５人と、闘士が１人……だったっけかな」
「え、それだけなんすか？全然把握してないじゃないっすか」
シャクは、目を開いて、大げさに驚いたリアクションを取る。
「元々、あまり表に出て来ない存在なんだぜ？　しょうがねぇだろ」
「そうっすけどー」
「ガイナさん、ガイナさん。この結界どうしますか？」
と、スンが声をかけてくる。
「まだそのままにしておいてくれ。壊しても、何かが変わるわけではないのはわかっているが、まだ記録が済んでない」
「わかりましたー」

ポンはガイナとともに南下し、残りの３箇所の記録を終えた。
「じゃぁ、結界を壊してくれ」
ガイナはシーバーで、他の３箇所に合図を送ると、自分も結界を壊しにかかった。壊すといっても、基点には、アルーファのロゴが入った白い杭が刺さっているだけであり、それを引っこ抜けばいいだけだ。結界の規模の割に、とても簡素で脆い。しかも、結界の機能を停止したのはわかっても、何も周囲に影響は無い。だが、ガイナ達の所属する平和連盟『イロハ』の方針で、記録を取り破壊することになっている。アルーファの仕掛けたものだと明白な以上、そのまま放置するほうが危険だろう、という判断からだ。
「ガイナさんは、この結界にどんな意味があると思いますかー？」
ポンは、真剣な目で抜いた杭を見つめているガイナに話しかけた。

ガイナの目は大きく、真っ黒な黒目は意志の強さを伺わせる。
「あいつらの作ったもんに意味なんかねぇよ、壊すため殺すための道具でしか無い」
「そう……ですかっ」
ガイナの声は、落ち着いていたものの低く太い声で、若干の憎しみの感情が混ざっていた。
（ガイナさん……、アルーファについて話すとき、すごい怖い顔をする……）
ポンは、ガイナの返答と雰囲気を努めて気にしないようにしながら、ガイナに笑いかけた。
「ガイナさんー？　そろそろ行きましょうー？　みんなと合流して、飛行船に戻りましょうっ。色々あったからっ、きっと他の小隊を待たせちゃってますよっ」
ガイナは背が高い。背が低いポンは、自然と下から覗き込む形となった。
「ん？　あぁ、そうだな。戻るか」
ガイナからは、先程の緊張感が消え、いつもの穏やかな表情に戻った。それを見て、ポンは、少しほっとする。
「飛行船へ帰還する。北から2本目の基点に集合しろ」
ガイナはシーバーに話しかけ、ポンの方を向く。
「行こうか」
「はいっ」

任務の山を越えれば、誰しもが気が抜ける。合流して飛行船に戻る途中、全員が全く別の事を考えていた。
ポンはガイナについて考えてた。ガイナのアルーファに対する感情は尋常ではない、と。この平和連合『イロハ』には色んな人がいる。もちろん、アルーファに被害を受けて、イロハに入った人もいる。ガイナもその口なのだろうか、と。
対して、ガイナは飛行船に戻ってからの事を考えていた。勝手に

二人組にして行動し、隊員を命の危険に晒し、軽いとはいえ怪我人を出した。しかも、集合時間も過ぎている。そんな事は日常茶飯事ではあったが、叱責を受けるのは気持ちのいいものではない。むしろ、まだ任務途中にこんな事を考えている時点で、集中できていない、と思っていた。

（次の休みに、少し遠出するか……。ここんとこ忙しかったからな。気合を入れなおさねぇと）

飛行船に戻ったのは、やはりガイナの班が一番遅かった。だが、生存者の確保、ゴイルタイガーのデータの採取、結界の記録、結果も一番残していた。

そして、救出したあの生存者も一度目を覚まして、水とパンを欲しがった。介抱してたセチが、それらを与えるとまた眠りについたらしい。

（全て荒地にされてしまったけど、成果があってよかった……。これは絶対に次に生かさないと……）

ポンは一人強く決意し、休息についた。

7章

ここは、ガヤコシ大陸にあるヨシカの国です。ガヤコシ大陸は、北半球にある大陸で、あまり発展はしていませんが、まだ豊かな自然が残っています。世界最大の原生林と平原もありますし、広い大陸には、山も海も川も湖も何でもあります。動物も魔物も、とてもたくさん住んでいます。もちろん、人もたくさん住んでいます。背が低くて筋肉質なドワーフもこの大陸の高地にまだ多く住んでいます。それに、いくつかの種類の獣人達も、この大陸に故郷を持ってます。獣人は亜種が多くて、総称でシリアンスロゥプと呼ばれていますが、ほとんど人間と見分けがつかない種族から獣に近い種族まで、たくさんの種族が確認されてます。

今いるここ、ヨシカの国は、温暖な気候と未だに残る豊かな自然から観光地として有名です。なおかつマナがとても薄い干地であるため、争いも少なく、穏やかな空気を感じます。

僕は、15歳になった自分へのご褒美として、ヨシカに遊びにきました。僕が親方に拾われて、工房に住んでから5年、本格的に働き始めて丸2年が経ち、親方がたまにはどっか行って来い、と1週間の休みをくれました。それではと、何度も話を聞いて行ってみたかったヨシカの国に決め、カバン一つだけ持って、ここに来ました。親方と工房のみんなが少しづつ餞別をくれたので、お土産をたくさん買って帰りたいと思っています。

ヨシカには、船で来ました。僕の住むセゴオ地方にあるカワカの国は、ヨシカと同じ北半球にあって、世界地図でみると海一つ挟んだだけの場所にあります。ちょっと奮発して高速船に乗ったので、丸1日で着きました。視界いっぱいに広がる海を眺めてるのは、新鮮な気持ちだったし、船の椅子もベッドも食事も、本当にいいものだったので、あっさり着いてしまい残念でした。

お昼過ぎぐらいにはここに着いたのに、今はもう夕方です。
素朴で簡素なのに大きな家が立ち並び、カワカでは見られない種類の植物がたくさんみられ、海沿いは白い砂浜がどこまでも続いています。露天には、変わったアイテムが並べられています。マナを感じるキレイに透き通った法具、くすんだ色をしたドクロ型の法具、見たことがない動物か魔物の骨、着ると涼しくなるコート、値段は高めですがどれも気になります。僕はご飯を食べるのも忘れて、町を眺めて歩きました。ここはゆっくりとした時間が流れています。誰も空を飛ばないし、身体強化もしていない。感知魔法も使っていないようです。

お腹が空いたので、露天が立ち並ぶような場所から歓楽街の方へ向かいます。でも、どのお店もすごい魅力的で迷ってしまいます。道の真中でオロオロしていると、人とぶつかってしまいました。
「あっ、すいませんすいません」
「おい、ちゃんと気をつけて歩けよー」
「すいませんすいません」
「ん？　……ボウズ、一人か？」
「は、はい。そ、そうですけど」
怖そうな人です。背が高くて、髪を伸ばして編み込んでいます。僕の足より太い腕、はち切れそうなTシャツ。口元がにやついているように思えます。
「ちょっとこっちこいよ。いい店紹介してやるよ」
「い、いや、だ、大丈夫です、大丈夫です」
「あぁ？こねぇっての？」
「い、いきますいきます」
いきなり腕を掴まれ、路地の裏の方へ、引きずられるように連れていかれます。僕は怖くなります。細い道を曲がり、もう一回曲がり、人気が無くなったところで、僕は地面に放られました。

「んでよぉ、もうわかってんだろーけど、幾らくれんのかなぁ？」
男は、にやにやしながら、僕を見下ろしてきます。僕は、やっぱりか、と肩を落とします。昔から、こういう事がよくありました。最近は、あまり無くなったのにな、と。
「ぼ、ぼっく、おかね、も、もってないです」
「はあぁぁ？　ねぇわけねぇだろぉがよぉっ！」
男は怒鳴りました。この声に気づいて誰か助けてくれないかと思います。僕はもう腰が引けて、立てそうにありません。
「い、い、いまだ、だしますっ」
僕は怖くなって、カバンの中の財布を探します。
（幾ら取られるんだろ、きっと全部だよね……。はぁ、最悪……）
「ちんたらしてんじゃねぇよっ！」
「うぐぅっ」
男は怒鳴りながら、僕のお腹に右足で蹴りをいれました。とても痛いです。呼吸ができてるのかできてないのか、それがわからなくなる痛くて苦しいです。カバンをさがす手が余計止まってしまいました。

「おいっ、お前何やってんだ！」
僕たちがやってきたのと反対の路地から、鋭い声が聞こえました。僕は、顔を向けると一人の男の人が立っていました。茶色いクセッ毛に大きな目、口は締まり意志が強そうです。黒い無地のシャツを着ており、背中に１本の大剣を抱えています。年は２０代前半ぐらいでしょうか。
「あぁ？なんか用？」
「お前、そんな子どもいじめて楽しいのかよ！　そこを離れろっ」
２０代の男は、僕の目の前の男に大声で威圧します。僕は、助けが来てくれて、少しだけほっとしました。僕は少しづつ、男から後ずさりします。
「なに？　なに？　邪魔すんの？」

目の前の男が、２０代の男を挑発します。すると、２０代の男は淡い光をまとい始めました。次の瞬間、ものすごい風と共に、僕と男の間に入っていました、僕に背をむけて。
目の前の男が、顔をこっちに向けるまでのほんの僅かな瞬間で、背中の剣を右手で抜き、男の首筋に当てます。男の顔は驚愕しています。
「わ、わかった、わかった……。いやぁ、人違いしちゃったなぁ！はははは」
男は、せこせこと歩いてきた道を戻っていきました。
「大丈夫か？」
２０代の男は振り向いて、声を掛けてくれました。首には、平和連合『イロハ』のロゴの入ったペンダントをしていました。

8章

「先程は本当にありがとうございましたっ」
「いいっていいって。そんなことより、飯食えよ。冷めちまうぜ」
「は、はい。いただきますっ」
「この串焼きはうまいぜ。何の肉だかはわかんねぇけどな」
「んぐんぐ……。すごい……んぐ……おいしいです。んぐんぐ。でも、頼みすぎではないですか？　ゴクゴク。テーブルがパンパンです……」
「好きなだけ食えよ。出してやるからさ」

「んぐぅっ。そ、そんな！　僕がお礼に出しますって言ったじゃないですか！」
「いいからいいから。子どもに奢られるような身分じゃねぇからさ」
「それじゃぁ僕の気持ちが収まりません！　受けた恩はしっかり返せって言われて、育ったんですから！」
「ゴクゴク……ぷはぁっ。じゃぁ、次会った時に返してもらうよ」
「んぐんぐ……ゴクリ。そんな今度いつ会うかもわからないのに！……えっと、すいませんが名前を聞いてもいいでしょうか？」
「そういやそうだったっけな。ガイナだ。イロハで兵隊やってる」
「やっぱりイロハの戦士だったんですねっ。ペンダントをしてたし、すごい強かったからもしやと思ったんですよ。んぐんぐ」
「ゴクゴク……ゴクゴク……ぷはぁっ。で、君の名前は？」
「あ、すいません。ドルです、ドル。カワカの国で、鉄器の工房の見習いをやってます」

「へぇ、カワカは工房多いよな。何度か行った事あるが、いい工房がたくさんある。んぐんぐ。」
「はい、技術の修行にはいい場所です。んぐんぐ。僕も早く自分の

工房を持てるようになりたいです。ゴクゴク」
「ゴクゴク……おーい、串焼きとビール２つづつくれーっ！　いい目標だ、そん時は俺の剣もみてもらうかな」
「まかせてくださいっ！　まだまだ先になりそうですけど」

「ここには、観光にきたのか？」
「ゴクリ。そうです、親方が、１週間の休みをくれて、ゴクゴク、前々から来たかったんで、よしっと思って」
「ゴクゴクゴクゴクゴクゴクぷはぁ。マスター、ビールーッ！　ドルは今いくつなんだ？」
「んぐんぐ。先月、１５になりました。んぐんぐゴクゴク。この串焼き、ホントにおいしいですね、何の肉なんだろう……？」
「さぁな、後でマスターにでも聞いてみな。って、まだ１５だったのかよっ。落ち着いてるからもう少し上かと思ったぜ。確かに見た目は幼い気もするけどな」
「ゴクリ。よく言われます。お前は見た目幼いのに、落ち着いてるから年がわかりにくいって……」
「悪いことじゃぁねぇさ。こっちには、どれぐらいいる予定なんだ？んぐんぐ」
「４日ぐらいは、ここらへんをまわってみようかなぁって思ってます。珍しいものばっかりで、行きたいとこが増えました」
「そうかそうか、次はもう変なのに絡まれちゃだめだぜ、いつも誰かいるわけじゃないからな。ゴクゴク」
「身に染みました。ホントにありがとうございます」
「気にすんな気にすんあ、こんなもんお互い様だ」
「はい……」

「ん？なんか向こうが静かになったな……んー？　げっ、なんだあいつは」
「うっわー、すっごい格好の人がいるんですねー。背ぇ高いのに、

長い髪を全部立ててますよっ。先が天井にくっついちゃってます」
「しかも、色は虹色……どうすりゃあんな色になるんだ？」
「着てる服もすごいですね、ピンクのキラッキラのタキシード……なんですかね？」
「模様が緑の星ってのも、なかなかのセンスだと思うぜ。あの格好で、一人でカウンターで立ち飲みか、そりゃ周りも静かになるよな」
「ガイナさん、しかもあの耳……」
「恐らく、エルフなんだろうぜ。後ろ姿しか見えねぇが、すっげぇ美男子かもしれないな」
「よく見ると靴も変わってますね。すごい平べったいし、金色ですよ。僕見たことないです」
「俺もねぇよ。お、こっち向くぞ。座ろう」
「ガイナさん、ヨシカにはあのような服装の人が多いんですか？」
「なわけねぇだろ。ヨシカどころか、世界中……少なくとも俺が行った事ある地方にはいなかった」
「うわぁ、すごいキレイな男性ですよ。女性でもあんな人いないです」
「エルフは美男美女しかいねぇからな、羨ましいぜ」
「なんかキョロキョロしてますよ、誰か探してるんでしょうか」
「ドル、そんなチラチラ見てるなよ、ああいうのに絡まれるとやっかいだぞ」
「え？　はい。あまり目立たないように観察してたつもりですけど、わかりますか？」
「はは、バレバレだよ。まだ経験が足りなすぎるな」
「はぁ、そんなものでしょうか。……あ、こっちの方に歩いてきます」
「おっ。俺も顔を拝めるかな」
「なんか一直線にこっち見てますけど」
「ドルがチラチラしすぎなんだよ、もっと視線の端を上手くつかって……」

「あ……やば」

「ねぇねぇねぇねぇねぇねぇ、君がドル君？　私と一緒にちょっと飲まない？」

「えっ？」

9章

今日はマジで久しぶりの休みだ。昨日と一昨日がミーティング、その前がゴカエ、その前は設備維持、さらに前は訓練訓練で、もっと前は……と思ったけど、せっかくの休みにそんな事考えるのはバカだな。外は、まだ暗いな。休みの日は、な、ぜ、か、早く目が覚めちゃうんだよね。今日は、何しよっかね。買い物？　そういえばそろそろ新しい帽子と、ボトムスが欲しいかな。まぁまぁ今日は金を使わないでおこう。疲れも溜まってるし、1日寝るか？　いや、それはもったいない、もったいなすぎる。待ちにまったこの日を無駄には出来ない。時間を有効活用しなくてはいけない。一番有効な使い方はなんだろう。有効、有効……か……。

こないだの作戦は、ドジったな。ゴイルタイガーごときに遅れを取るとは……。確かに、ゴイルタイガーは、皮膚は厚いし、魔力もあるから簡単な肉体強化魔法を使う。人間の体よりでかいし、力も強い。だけど、硬い皮膚のせいか、一瞬の動きはそこまで速くない。一人では苦戦したとしても、二人で連携すれば焦る必要の無い相手だった。

原因は、いくつか考えつく。まず一つは警戒を怠ったことだ。荒地が広く続き、もう何も無いと思って、相方のスンに感知をまかせてしまった。スンは、後方担当とはいえ感知魔法は得意ではないのに。2つ目は、遭遇時に先手必勝で初撃を与えようとしてタイガーの後方に周ってしまったことだ。思った以上に皮膚が硬く、俺のロングソードでは大した傷を与えられなかった。また、その行動が原因で、俺とスンは分断され、タイガーの正面にスンが来てしまい、タイガーの攻撃対象はスンに向いてしまった。分断された事により、スンは支援魔法を俺にかけることも出来なくなり、俺もまずスンの安全を確保しなくてはいけなくなった。3つ目は、その分断された

状態で、スンは森の中に身を隠すという選択をした。野生の動物や魔物は、逃げるものを追う習性がある。タイガーは、スンを追い、自分の得意とする森へ入っていった。

そこから、今思えばかなりギリギリの展開だった。森の中は思ったより茂っていて、スンは上手く飛べず、木や草の生い茂った足元の悪い場所を走っていた。その点、タイガーは速かった。少しづつ、少しづつ、スンに追いついていく。俺は、ガイナさんに連絡しながら、タイガーの後ろを追い、閃光魔法や中距離攻撃魔法で注意を引こうとしても、草木が邪魔で上手く行かなかった。その後、スンは森を出てまた荒地に出た。そこで俺はスンにすぐに森に出るように指示を出し、自分は邪魔な草木を強引に破壊して荒地に出る。タイガーが荒地に出るのと同じタイミングで、俺は荒地に出た。タイガーはまた森に身を隠したスンを見失い、やっと俺に対して注意を向けた。最後、強引に草木を抜ける時に、腕を怪我した。

やっと、立て直せると思った時に、ちょうどガイナさん達がきてくれた。

ガイナさんとポンさんの連携は見事だった。空から地面に降り立ち、ガイナさんが一直線にこちらへ向かってくる。ガイナさんは、走りながら剣を軽く振り、剣先から強い光の玉を放って、タイガーの注意を引きつけ、一瞬の動きをとめた。その間、ポンさんは後方から、ガイナさんの腕と足の筋肉の強化、剣の硬度の強化を行った。そして、ガイナさんがさらに加速して、タイガーの間合いに入る瞬間を見計らって、威力はなくても速く正確な攻撃呪文をタイガーにヒットさせた。そうして空いた間合いから、ガイナさんが致命傷を与える。ポンさんは、その間に俺の腕の止血をし、ガイナさんは2撃目を入れ、止めを刺す。ガイナさんが地面に降りてから10秒ぐらいだろうか。無駄な時間はどこにもなかった。

決めた！　今日は自主トレをしよう、自主トレ。本当なら、スンと一緒に訓練したいとこだけど、今日は確か買出しにいくっつって

たな。じゃぁ、一人でやるか。剣か、魔法か……。いや、どっちもだ。俺は、一人で確実にゴイルタイガーを倒せる力が欲しい。ガイナさんとポンさんの連携はすごかったけど、元々二人は連携無くても戦闘技術はすごいからな。やっぱ、こういうのは個人の力も重要だよな。裏の訓練場はあいてっかな？　よし、決めた。そうと決まれば、行くしか無い。さっさと着替えて、訓練にいこう。

俺は、任務の時と同じように、鎖帷子を来て、額当て、肩当て、胸当て、腰当て、膝当て、篭手をつけ、ロングソードを肩にかけると、宿舎の裏にある訓練場に向かった。宿舎の廊下を歩いていて、隊長の事を考える。隊長の休みの日の行動はよくわからない。休日に、廊下ですれ違う事もあるが、私服はかなりダサい。結婚もしていないようだし、多分彼女もいないだろう、と思う。そういえば、冬でもサンダルを履いている。あんな格好で街を歩くのは、俺にはできない。もしかしているかなと思い、そのまま隊長の部屋へ向かった。ドアには汚い字で、名前が書いてある。俺は、ドアを叩く。

「コンコン、おはようございまーすっ。シャクっすけど、ヤード隊長いらますかーっ？」

中から重い足音が聞こえ、ドアが空き、無精髭を生やした隊長が顔を出した。

「あぁシャクか、どうした？こんな朝っぱらから」

言われて気付いたが、まだかなり早い時間だ。休みの日に起こしてしまったか、と思ったが、既にダサい普段着を着ている。下が青色、上が黄緑は中々難しい組み合わせではないだろうか。

「もし、隊長が暇なら、稽古をつけてもらおうかと思ったんすけど、時間あります？」

「あ？今からか？そうだなぁ。昼までならいいぞ」

「じゃぁ、裏の訓練場で待ってますんでお願いしまっす」

「着替えたら行くからよぉ。ちゃんと準備運動しとけよ」

「うーっす」

俺が、軽く準備運動が終わると、すぐに隊長がやってきた。着替えるのが早い。手には、愛用の十文字槍を握っている。
「しかし、シャク、お前が休日に訓練とは珍しいじゃないか」
「ちょっとこないだの任務でしくっちゃったんでー、なんかムカつくじゃないっすか」
「はっはっは。いい心掛けだな。お前にしちゃぁ、殊勝なことだ」
「なんすかー、その言い方。俺いつも真面目っすよ」
「気にするな、だがお前は口調で少し損をしてるけどな」
「えー、そんな普通っすよ普通」
「まぁそんな事はどうでもいい。さて、何をする？」
「タイマンでどうっすか？」
「俺とお前がサシでか？はっはっは。いいよ、やってやろう」
「本気で、たのんますよ」
「もちろんだ」

訓練場にある小さな闘技場へ移動した。地面にロープで四角く囲ってあるだけの、本当に簡素なものだ。
「魔法は使っていいのか？」
「もちろんっすよ」
ロープの内側に、俺らは対峙する。二人揃って、体が白く光を放つ。お互いが自分自身に強化魔法をかけ、さらに相手を弱体化させる呪文の掛け時を狙っている。
俺は両手でロングソードを中段に構える。隊長は、槍を右側に構えて、切っ先を地面スレスレまで下ろし、腰を落としている。
動こうと思った時、意外にも隊長が先に動いてきた。
隊長は左足を軽く踏み込み、低い位置に構えてた槍を下から上へ払うように、俺の頭を狙ってきた。俺は、上半身を後ろに反らしながら一歩下がった。
「隊長、はやいっすよ、動きが」

恐らく、当てるつもりの無い一発だろう。だが、速かった。額から汗が吹き出したのがわかる。
「お前が遅いんだ」
隊長は、再度ぐっと踏み込み、俺の頭部に向かって一直線に槍をついてきた、すごい速さで。俺は、また軽く上半身を反らしつつ一歩引いた。それで避けきれるはずだった。
（……なっ、伸びる……！）
慌てて、上半身を思い切り反らして、一発を免れる。切っ先が額をかすめる。
「相手から目を離しちゃダメだろ」

慌てて、隊長の方に視線をやると、右足を踏み込み槍を片手一本で突いた、その姿勢のまま左手にマナを集めている。その光を俺の方に放つ。上半身を逸らしたまま、ロングソードで光をなぎ払う。そして、左の篭手で目の前の槍を振り払う。後ろに倒れるような姿勢のまま、左足に力を入れ、右足を一気に上に振り上げる。隊長は、一歩引き、俺の蹴りを交わす。俺は、そのまま一回転し、姿勢を整える。

また隊長が一気に間を詰めてくる。右側に槍を構え、どんどん突いてくる。左手、左肩、左膝、左目、左手、右膝、左胸。一発で戦況が決まる箇所ばかりをピンポイントでついてくる。篭手で受けたり、ひねって避けたり、剣で払ったりと反撃の隙が無い。
俺は思いっきり後ろに飛ぶと、全身に強化魔法をかける。地面につく直前に、隊長に向かって閃光魔法を放つ。足が地面につくと、隊長に向かいダッシュし、閃光の効果が消えないうちに間をつめる。初撃は、ダッシュを生かした突き。それを右上に斬り上げ、右から左への水平切りに繋ぐ。左下から右上へ斬り上げ、さらに垂直に斬り下ろす。隊長は、半身を維持したまま、槍の柄を上手く使って全て流していく。上下左右と突き、なるべく隙を与えないように斬撃

を続けるが、体までは届かない。
そして、突きを出した瞬間、それを交わし、柄で剣を強く打ち払った。俺は姿勢を崩し、右側がノーガードになった。まずい、と思った瞬間、隊長の右の回し蹴りが、モロに顔面にヒットした。
俺は、５ｍほど宙に舞い、意識を失った。

１０章

平和連合『イロハ』。それは、主要２５ヶ国が世界の安全保証と社会経済の発展を目的とし設立された組織である。各国の元首の署名により推薦され、イロハの幹部１３名により承認を受け、イロハの一員、イロハの兵士、として働く事ができる。組織全体の人数に対する、自国出身の兵士の割合により、各国の出資額が決められる。拠点基地は南半球の大型の島『ミヤオ島』にあり、小規模な基地は世界各地に存在する。

基本的には、どこの国の影響も受けない完全独立な組織ではあり、世界全体の安全保障と社会経済の発展の為に行動する。だが、強国や兵士を多く輩出している国の影響が大きくなるのは避けられず、近年は徐々に問題となっている。

ポンが、その入るだけでも手間のかかる組織に入職してから、すでに6年が経っていた。　入職したのは１５の時。理由は、平和のために働きたかったから、という何とも平凡なものであった。まだ子どもであるポンが、なぜイロハで働くことが出来たのか、単純にコネとタイミングであった。

ポンの故郷は北半球にある小さい国、皇国イッポンマツ、である。イッポンマツは歴史の深い国であり、ポンはそこの上流階級のお嬢様であった。幼少より魔法の指導、特に後方支援魔法の指導を受けたポンは、１５になる時には大人顔負けのサポーターとなっていた。その頃、平和連合が加盟国を１５ヶ国から２５ヶ国への拡大を決定した時であり、イッポンマツも念願の連合加盟が実現したところであった。そこにポンが大抜擢されたのである。

ポンはの父親は、宮廷での地位も高く、ポンの意志とまた自分の将来の地位向上のためにポンを猛烈にアピールし、保守的な考えをするものが多いイッポンマツの中で、他１０余名と共にイッポンマ

ツの代表としてイロハへと入職することとなった。

ポンは、鏡の前で自分の服装をチェックした。タイトなジーンズに、コトブキ色の七分袖のTシャツ、黒のジレベストを羽織り、栗色の髪は肩まで下ろす。あまり色気は無いのは、自分でわかっていた。以前は、ミニスカートやワンピースなども良く着ていたし、化粧も髪型と合わせて、出掛けていた。だが、戦闘に慣れ、街での呼び出しやメイク中の呼び出しなどを体験すると、どうしても動きやすさを重視してしまうようになる。

（……まだ、21なのに、これじゃあ一生イロハかなぁ……）

イロハに入職する時、世界の平和の為に一生頑張ろう、と決めた。それは仕事が何度も変わった今でも変わってはいない。変わってはいないが、どうしても切ない感情が沸き上がってしまう。

自室を出て、寮の入り口で待ち合わせの相手を探す。今日は友人のユウと買い物に出かける予定だ。これから迎える夏に向けての衣装探し、ということではあるが、正直なところ、出掛けないで休息したい。もしくは、次に向けて訓練をしたい。

「遅れてすみませーん。待ちましたー？」

「全然、いまきたとこ」

ユウは、一つ下の20歳でイロハの食堂の料理人だ。食堂で働く職員は、各国の代表ではなくイロハが直接雇用した職員で、ポンなどの代表組とはあまり接点が無い。だが、ある事がきっかけで、仲良くなったのだ。

「じゃぁ、いこっか。どこから行く？」

「こないだ新しいお店みつけちゃったんで、そこから行ってもいいですかー？」

「じゃぁ、そこいこうよ」

ユウは、淡い黄緑色のワンピースに大きめの麦わら帽子をかぶっている。今日は久しぶりに暑い日になりそうだし、素直に可愛い服

装だと思う。ユウは、黒いショートカットに切れ長の眉とくっきりした二重。低い鼻と控えめな口、そして圧倒的に綺麗で敵いそうにない、細かく真っ白な肌。
（……なんて眩しい子なんだろう、この子は……）
「ポンさん、どうしたんですか？」
「んーん、なんでもないよ」
内心を見透かされたようなタイミングで声を掛けられ少し焦る。
ポン自身も、自分の容姿は悪い方ではないと思っている。髪は綺麗な栗色だし、目も大きい方だ。いつも鍛えているおかげか、背筋も伸びきっていると思うし、スタイルも悪くない。でも、目の前の一歳年下のユウには、特にあの肌は、大きく自信を傷つける。
「ねぇ、ユウ。ユウって、なんか肌のケアとかしてるの？」
「んー？特に何もしてないですよ？毎日、お風呂に入るぐらいです」
（これが才能の差……）
無闇に聞いてしまったことに落胆した。
「ポンさんの肌も綺麗じゃないですか、健康的で憧れます」
「そ、そうかな？……ははは」
さらに追撃を受け、その後しばらく何を話したのかは覚えていなかった。

「あぁ、あまぁい、何個でも食べれそーう」
「でしょっ、こないだ見つけたお気に入りの場所なんですよ」
久しぶりにユウと出て来たが、やっぱり来てよかった。ユウの見立て、お世辞に乗せられ夏の服、しかも可愛らしいものを何着か購入し、しかも、こんなお店まで連れてきてもらった。
「ユウ、ホントに色んな店知ってるね」
「休みの日は毎日外に出てますから」
３つづつ頼んだケーキは、もう１個づつになっている。
「えらいねー」

「私は休みの日にどっか行かないのがもったいなくて」
ユウの若い考えが耳に痛い。若いと言っても一つしか違わないのだが。
「私は最近は本部から出る事も少ないよ」
「ポンさんは兵士ですから大変ですよね、訓練とかもあるし」
確かに、自分は兵士だ、とか、訓練の疲れが、とかを理由に引き篭もりがちだなと感じる。最近は大きな戦闘は無いし、訓練も特殊なものは少ない時期だ。だから、そんなに疲れが溜まっているという程ではないはずだ。いや、戦闘や訓練が無いからこそ、弛んでしまっているのだろうか。そういえば、お腹のまわりの肉も少し気になるかもしれない。
「ユウって結構食べるよね」
「私あまり太らないみたいなんですよね」
今日、何度ユウに傷つけられたであろうか。ただ可愛い後輩であるだけのユウには、何度も死線をくぐり抜けた自分の剣も届かない。

「久しぶりに楽しかったぁ」
「息抜き出来ましたか？」
「ばっちりだよ、ユウありがとう」
「私も楽しかったです、ありがとうございます」
夕日で赤く染まり始めた頃、少し涼しくなった道を歩いた。遠くにオレンジ色の綿のような雲が見える。
（小さい頃色んな空想をしたよなぁ……）
「ところでポンさん、ガイナさんとはどうなんですか？」
「ええ？なにそれ？」
不意をつかれて、一瞬目が泳いでしまった。
「上手くいってるのかなぁって」
「ガ、ガイナさんとは何もないよ」
「ホントですかぁ？」

「ホントにホント」
「えー。今日の事だって、ガイナさんに一言言われたんですよー」
「えぇぇ？な、なにそれ？！」
「いや、ガイナさんが最近疲れてるみたいだからって……あっ、ポンさん、あれ？あの人……」
とても気になるところで話をきり、ユウは前から歩いてくる中年っぽい男性を指差す。
「あぁ、あれはデシさんだよ。うちの隊の兵士だよ。あぁ、見えて実は結構若いんだよ」
「そうですよね？私も前にポンさんと一緒に活動してるの見てそうだろうと思ったんですけど……」
「どうしたの？」
「あの人最近良く見かけるんですよね。私が、夕方に帰ろうとすると、いつもすれ違うんですよ」
「へぇ、デシさんお酒好きだから、飲みにでもいってるんじゃないかな？」
「そうなんですかね？確かに向こうはバーとか多いですけど」
「でしょ？」

寮につきユウと別れて、部屋のベッドに横になった。
（疲れたー。楽しんじゃったー）
久しぶりの心地良い疲れに、すぐに寝てしまいそうだ。窓から入る風が、気持ちいい。

ポンは、そのまま目を閉じ、深い眠りへと落ちていった。　しかし、その心のどこかで帰りに見かけたデシの姿が引っかかっていた。
（そういえば、イロハのペンダント外してたなぁ……）
その日、デシを見かけたという事実には翌日にはもう忘れていた。

11章

「またやられた。なんでだ？なんでこうなるんだ？どこであの情報が漏れてるっていうんだ？」
　赤髪の男の声が狭い部屋に響く。無機質な石壁は、狭い部屋をより狭く演出する。円卓の中央に置かれたランプの光は弱く、部屋を照らすという機能を満たしているとはいいがたい。ランプは壁に6人の影の縞模様を作り、何の意志も感じさせない部屋に唯一の思考を彩っている。ある影は大きく揺らぎ、ある影は右へ左へ、またある影は岩のように動かない。
「この場に裏切り者がいるっていいたいのか？」
「そんな事までは言ってない。だが、もう3回も続いてる。その3箇所の正確な場所を知ってるのは、ここにいる6人だけだ」
「その3箇所は、いずれも超広範囲魔法で壊されただけだ。アルーファの連中だって正確な位置を把握してるとは思えない」
「だが、やられてばかりだぞ！？こちらは、アルーファの幹部すら特定できていないというのにっ……」
「まだ全ての起点が壊されたわけじゃない。それに全て壊されたとしても、すぐにシステムが止まるわけじゃない」
「それにしたって……このまま指を咥えてろっていうのか？」
「そういうわけではない。だからこそ、今日は一つ面白いものを持ってきた」
　部屋を彩る影が揺らぐ。今まで沈黙していた4人も男の用意したものが気になるようだ。
　男が何かを用意したのは、これが初めてではない。それは人だったり、物だったり、情報だったり、様々であったがハズレだった事は無かった。過去の問題を解決してきた男の差し入れに、部屋の空気は揺らぐ。
「何を？」

今まで沈黙していたものが一声を放ち、男は唇だけ軽く動かし、無言で応える。年齢も感情も読み取れない男の表情は、眼だけがギラギラと輝き、周囲を一瞥した。
「アルーファのアジトを突き止めた」
「ばっ……馬鹿なっ！」
赤髪の男は、声を張り上げた。
「調査隊はアジトどころか、幹部の名前すらわかっていないと言っていたぞ！デタラメだっ」
赤髪の男は、呆れたような表情で、それでも口調は強く男に迫った。
それでも他の４人は何も言わなかった。腹の探り合い、とでも言わんばかりに、自分の驚きの感情を押し殺し、周囲を見渡している。
「アジトを突き止めたのはイロハの調査隊ではない。私の直属の私設部隊だ」
「なにっ？各国の精鋭からなるイロハの調査隊が、あんたの私設部隊に劣るっていうのかっ？！」
「我々は運が良かっただけだ。能力云々の話はここでは重要ではない。この話は、週明けにも本会議の方に報告する。そうすれば、早いうちにもアジト壊滅へ向けて動く事になるだろう。アルーファさえ無くなれば、我々の目的は達成されるはずだ」
男は強い口調で、そう言い切った。ランプの炎が、揺らめき、影の陰影を踊らせた。
「どんな手段を使った？」
年齢を重ねた男は、低く深い声で問いかけた。
「それは答えられない。部下の命もかかっているのでね……さて、もう議題は無いだろう？私は帰らせて頂くよ」
男の子は、素早くに立ち上がり、滑るような動きでドアの向こうに消えていった。
（……なんということだ）

赤髪の男は、誰もいなくなった会議室で頭を抱えていた。相変わらず薄暗い部屋だったが、人が減り幾分明るくなったように感じる。

（アジトを特定しただと……よりによってこのタイミングで……）

赤髪の男の国は、この六人会での地位を危ういものにしている。大国ではあるが、管理している結界を２つ破壊されていた。残る結界は１つしかない。もはや後が無い状況である。アルーファ以外にも、何かの拍子に結界が壊れてしまえば、この六人会での発言力は無くなる。いや、六人会で発言出来なくなるぐらいなど、結界から受ける恩恵に比べれば、どうでもいいことだ。

（くそっ、なんでうちだけが……）

他のところの結界も壊れてしまえば、結界の修復の話も出るのであろう。しかし、先程の話が本当なら、近いうちに討伐隊によってアルーファは壊滅させられてしまうだろう。今まで遅れをとっていたのは、情報が全く無いだけで、イロハがアルーファに能力で劣っていたわけでは無い。

（このままアルーファが討伐されれば、うちだけジリ貧だ……）

結界の恩恵はとても大きい。それは世界中の金を全て自国に吸い取るようなものだ。結界があるだけで、国は安泰であり、国民は幸せだ。だが今、国を支えたその結界の危機である。結界が無ければ、国は地盤を失い、さらに、自分はその責任も負わされる。

赤髪の男は、その重責に吐き気を覚えながら、遂に席を立ち、ドアの外へ歩き出した。

12章

「ちょっと待て！お前誰だ？ドル、お前の知り合いか？」
あまりにも奇抜過ぎる男に話しかけられ、思わず立ち上がってしまい、怒鳴るような形になってしまった。店内のランプが、男のメタリックなショッキングピンクのタキシードを彩っている。その美形のエルフは余裕の表情でドルを見下ろしている。ドルは、ガイナの問いかけに対象すごい勢いで首を左右に振っている。首が取れるんじゃないかというほどだ。
「んふ。私はドル君を知ってるけれど、ドル君は私のこと知らないんじゃないかしら？」
響きがいいバリトンの声なのだが、その甘い妖美な口調とあまりにもミスマッチだ。
「で、お前は……あなたはどちら様で？」
ガイナは、店内の注目を集めてしまった事を後悔しながら、多少落ち着いて問い直した。ドルは、男の深い群青色の瞳から目を離せずに、口をあんぐり開けたままだ。遠くからでも背が高いのはわかったが、こうして近づいてみると、思った以上に高い。さらに、髪を天井に届くほどまでに垂直に逆立てており、近くにいる時の圧迫感は相当のものだ。店内の酔っ払いたちは、面白そうだと注目している。人がいるのに静かな居酒屋ほど不自然なものはない。
「私？私はね、ゲン。ペパの賢者って言えばわかるかしら？」
「賢者……！？」
ガイナは、思わず聞き返していた。ドルは、さらに大きく口を開けている。店内は、またざわめき始め、「あいつ賢者だってよー」だの、「へぇ、やっぱ特印てのは、変わってんだなぁ」など、好き勝手な事を言っている。
「ちょっとドル君に用事があって、きちゃった」
バリトンの響きが、ガイナとドルを包み込む。店内は、目の前の

奇抜なエルフを肴にして、もう元通りの喧騒を取り戻している。
（……こいつ、何が狙いだ……？）
酔っ払い達は、目の前のピンクタキシードを早々に「賢者」認定したようだが、そもそも「賢者」はこんな普通の居酒屋に来るような存在ではない。

「賢者」は、「特印」と呼ばれる選ばれし存在の中の１つだ。「特印」は、世界を左右するほどの力を持つもの達で、世界に数百人ほどしかいない。その特別な力は、古代より代々受け継がれ、魔力や科学の研究が進んできた現代においても、無視出来ない存在だ。その中でも、「賢者」は７人しか存在しない。
賢者は、「七人集まれば未来が手に入る」と言われるほどの知識と力を持ち、歴史の転換期には必ず関わっていると言われる存在だ。また、「あまり表の世界には出て来ず自らの存在を誇示するような事はしない」という「特印」の特徴から、こんな居酒屋で堂々と名乗る事も考えにくい。
（だが、本当に賢者なら、考えあってのことか……？）
ガイナは、目の前のエルフの男について図りかねていた。もし、賢者が本気で何かをしようとしたら、ガイナごときではどうしようもない。
「……場所を移そうか。俺の部屋でいいだろ？」
「いいねっいいねっ、元からそのつもりだったんだよ」
ガイナは、すぐに店の会計を終え、ゲンとドルを引き連れ店の外に出た。店内からは、まだ目の前の奇抜な賢者の話題で持ちきりだ。
「俺の宿は、すぐそこだ」
ガイナは、店のすぐ前の小奇麗な三階建ての建物を指さした。
「……ガイナさん、やっぱりいい宿に泊ってるんですね」
落ち着いてきた風のドルが呟いた。
「……知り合いが店やってるんだ。ヨシカにはあまり来ないからな。来た時ぐらい顔出しとこうと思ってさ」

建物に入ると、坊主頭で白いTシャツの男が迎えてくれた。Tシャツの裾から、日に焼けた筋肉質の腕が覗いている。
「おぅ、ガイナ早いな。うぉっ、なんだその後ろの奇抜なお方は！」
「友達だ友達、部屋で飲もうって事になってさ」
「おっおぅ、そうか。まだ早い時間だけど、騒ぎすぎるなよ」
「わかってるよ。じゃぁ、ついてきてくれ」
ガイナは後ろの二人に声をかけ、カウンターの先にある階段へと向かった。

宿の3階に、ガイナは部屋を取っていた。ヨシカに来た時の定位置だ。新しい宿では無いが、小奇麗にしてあり、部屋からは目の前に広がる海を一望できる。夜中になれば、風と波の音が心地良い音を奏で、月明かりが水面をキラキラと灯してくれる。だが、今日は、バリトンの声が部屋を満たし、輝くタキシードが月明かりを圧倒している。
「で、ゲンとドルはどういう関係なんだ？」
「んー、そうだね。どう伝えればいいのかな？」
よくよく考えれば、ガイナとゲンは全く無関係だ。ガイナとドルも先ほど知り合ったばかりだし、ゲンとドルも知り合いとは言えないような仲のようだ。全く繋がりが無さそうな3人が、ガイナの部屋でテーブルを囲っている。だが、目の前のドルも放ってはおけない。
「ドル、ゲンの事は知ってるのか？」
「いえ、今日初めてお会いしたんだと思います。多分」
「そうだよ。私とドル君は、今日が初めて」
「なら、ゲンはドルにどんな用があるんだ？」
「……言っちゃっていいかしら？」
ゲンは、勿体ぶるように、俯きがちに上目遣いを使ってくる。仕草も話し方も、若い女の子そのものなのだが、声はバリトンであり、

ピンクのタキシードという出で立ちだ。
「もしかして、俺が居ないほうがいいのか？」
考えるまでも無く、ガイナは部外者だ。何か込み入った事情があるのなら、居ないほうがいいのであろう。それは、部屋に来る前、居酒屋にいる段階で気づいておくべきだった。だが、目の前のゲンに誘導されかのように、こんな状況になってしまった。
「んーん。ガイナ君も居たほうがいいね。君にとっても、重要な話だからね」
ゲンは全てを見透かすような眼でガイナを見つめて言った。ガイナはその視線を受け止め、すぐに逸らした。ガイナには、ゲンの思惑が全く読めなかった。そして、ゲンがゆっくりと口を開き、ドルに言い聞かせるように話し始めた。
「次の、ペパの賢者。それは、あなたよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5199m/

この世界を守るために

2011年1月19日20時22分発行